

< パネルディスカッション >

「玉作り遺跡の調査と研究」

コーディネーター 丹羽野 裕（島根県教育庁文化財課長）

パネリスト 梶山 林継

埼玉県（埼玉県立さきたま史跡の博物館 山田琴子）	: 資料 P9～12
石川県（（公財）石川県埋蔵文化財調査センター 伊藤雅文）	: 資料 P13～16
奈良県（奈良県立橿原考古学研究所 卜部行弘）	: 資料 P17～20
鳥取県（（公財）鳥取県教育文化財団調査室 小山浩和）	: 資料 P21～24
島根県（島根県教育庁古代文化センター 岩橋孝典）	: 資料 P25～28

丹羽野氏「 皆さん、こんにちは。梶山先生にご講演いただきまして、ほっこりしたり、笑ったりしているうちに、打ち合わせしたことまでほっこりと抜けたような感じがしますけれども、ゆったりとほっこりとお話をしていけたらいいなと思っております。

パネラーを見ていただきましたら、今ご紹介がありましたように、共同研究をしている各県の自治体で仕事をしている皆さんでございませう。普段は大学の先生とかでディスカッションということが多いのですが、今日は梶山先生を除きますと、皆自治体職員ということでございませう。そうかと言って決して質が落ちるわけではなく、かえって高いんじゃないかなと私は密かに思ったりするのです。そういうことは別にいたしまして、いつもとちがう構成でやってみたらどうなるかという、今日は記念すべき第1回でございませう。責任あるコーディネーターですが、会長県なものですからいたしかたなくお引き受けした次第でございませう。

それではまず始めに、基礎的な知識として、皆さんの資料からいくつかご説明をさせていただきます。資料の26ページをお開きください。ここに古墳時代の玉類の主な原材料というのがありますね。これを見ていただきますと、梶山先生のご講演にもありますが、ヒスイ（翡翠）はお分かりになると思います。透明で、きれいな、宝石のヒスイですね。それから、緑色凝灰岩というのが次に出てまいります。これは凝灰岩ですから堆積岩なのですが、それが緑色になっているものでして、このなかにはないのですけれども、やや軟らかめの緑色の石だと思ってください。特に弥生時代から古墳時代の前半ぐらいでよく使われる石です。その次に出てくるのが碧玉（へきぎょく）と読みませう。「碧」というのはこれ、緑の種類の一つです。深い緑色を表す字です。これは黒に近いようなものもあるのですが、磨くと非常にテカリのある、きれいな深緑の石になってきます。有名な産地が我が島根県の玉造にある花仙山という山でございませう。それからメノウ（瑪瑙）というのは、赤くて透明感があって、なかには赤くなくて、本当にわずかに赤っぽくて透明なものまで含みますけれども、これがメノウです。それから水晶は、このなかにはありませんが、皆さんご存じだと思います。今でも時に怪しい商法とかで使われる、透明な石ですね。これらが主だった今回の登場品でございませう。ここにバラバラっといっぱい

小さく出ているのはガラスですね。今日は主に、石で作った玉の玉作りについて、これからディスカッションをしていきたいと思っております。それから、玉の種類は 29 ページをご覧ください。古墳時代の玉の主だったものとしては、こういったものがあります。1 つ1 つを説明いたしません、一番多いのは、やっぱり管玉というものです。勾玉をつるしていきますと、間を埋めていく玉なのですけれども、この管玉が一番たくさん作られていますので、今日の議論もこの管玉のことがたくさん多く出てくると思います。あと、水晶でよく作る切子玉というのがあります。それから、29 ページの下にありますけれども、こういう石の原産地の 1 つ、碧玉やメノウ、水晶があるのが、一番左側にある島根県の出雲地方ですね。それから、さらに日本海側をずっと行きますと、北陸の今の石川県辺りに緑色凝灰岩、あるいは緑色凝灰岩のなかでも非常に質の良いもので、やっぱり碧玉が出てまいります、出雲の碧玉よりもこの北陸の碧玉はややちょっと、色が浅い感じの特徴があるということになります。それからヒスイが出るのはご存知のとおり、新潟の糸魚川産。これは大変な貴重品ですので、今日の議論からは特別なものとして外して、一般的なものでいきたいと思っております。それから右下に下がりますと、埼玉県辺りで、やはり緑色凝灰岩や碧玉のような緑の石が出てくるということでございます。それから、奈良県辺りにばあっと出ていますのは、これは玉作り遺跡がたくさんあるということで、今日、奈良県から代表的なものを、曾我遺跡を中心としたお話をしていただきたいなと思っておるところでございます。

ということで、前置きが長くなりました。それでは議論に入っていきたいと思っておりますが、まず玉っていうのは何かと、先ほど梶山先生から「玉は魂だ」と、こういうお話がございました。いわゆる今の現代の装飾品の玉とは違う意味があるのだということになるのですが、梶山先生、それ以外にも古墳時代には、この玉にいろいろな意味があったんじゃないかと思うのですが、その辺りをちょっと最初にご解説をいただけないでしょうか？」

梶山氏 「あまり言いませんでしたけれど、結局、装身具として、とは言うのですけれど、装身具の域を越えている可能性があるということです。だからこそ神まつりにも、あるいはお葬式のまつりにも、玉をたくさん使うということでもあります。自分たちが飾っている、きれいだというのも基本的にはあるのですけれども、それだけではない。それだからこそ色の問題もかなり問題がある。じゃあ、赤い玉を使っているのはなんだっていう言い方にもなるのですけれども、それは、赤い玉を使っているときには、やはり、活動的になるようなことに使っているかもしれないのです。穏やかに、穏やかにというだけでない可能性もあります。ですから、色によって、場合によっては、その気持ちを表している可能性もあると思います。これは、じゃあ、まつりのときはどんな色が多いのかとか、お葬式のときにはどんな色が多いのかとか、そこまで追っかけていかなければいけないのですけれども、これはいろいろな問題を含んでいると思います。

いずれにしても、まつりには、ずっとそのあとも、現代でも神社へ行けば、榊と言っていますけれども、榊の葉っぱが上のほうにちょぼちょぼとあるだけで、造花で飾って

あって、あとは五色の布がかかっていたりするのがあるのですが、あれは本来、大きな榊の枝を立てて、そこに五色の布をかけて、それから片方には鏡と玉をぶら下げ、片方には剣をぶら下げっていうのが本来の形でありますから、ああいうものが今でもまつりに使われていることは事実であります。お葬式のほうは、今ちょっとそういうのはなくなってきていますし、石の玉なんか入れると怒られるでしょうから、それはまあ、別としまして。今でもそういうまつりに使う使い方はあります。あまり言うと、時間がなくなるので。」

丹羽野氏 「 要するに、やっぱり古代の人にとって、玉に込められる意味っていうのは、すごく大きいってことですよね。かつ、古墳時代になると、その玉っていうものを古墳に入れるってことをたくさんするようになる。たぶんこれは古墳っていうのは、まだ国家が未成熟で制度がしっかりしてないときに、大きな古墳を造ったり、良いものいっぱい集めることによって、言うなれば、自分たちの権力を見せつけるっていうようなものがありますから、そういう貴重で霊力がある玉っていうものを、おそらく支配者なり、あるいは有力者なりが利用して、政治的にもおそらく利用しているのだろう。中央から地方に配ったりというようなことが、おそらくあったのだろうなあというようなことが推測をされます。そういったことを念頭に置いて、それでは、いよいよ玉作りの話に入っていきたいと思います。最終的には、古墳時代の玉っていうのが、全体のテーマではあるのですが、今日は玉作りの話ですので、流れから考えて弥生時代の玉作りからスタートしたいと思っております。最初にまず弥生時代の玉作り、つまり、古墳時代になる前の玉作りっていうのが、大ざっぱにどういったものかっていうことを、鳥取県の小山さんからお話していただきたいと思います。」

小山氏 「 はい。では、スライドの鳥取 1 をお願いします。まず、弥生時代の玉の種類についてご説明申し上げます。弥生時代の玉としては、円筒形をした管玉、それと勾玉があります。その他にも、水晶やガラス玉などがありますが、今回はガラスの製品は割愛して、石で出来た玉について触れていきたいと思います。まず、管玉ですが、画面左側のほうに写真を掲げております。鳥取県から出土した 1 セットの管玉です。この管玉は、碧玉や緑色凝灰岩といった緑色の石で作られるということは弥生時代によく行われておりますけれども、例外もあります。画面左側の 1 点だけ赤い管玉がありますが、これは先ほど楢山先生のお話にもあった鉄石英で出来た管玉です。この鉄石英は東日本のほうで主に生産、消費される石ですので、極まれにはありますけれども、こうしたものが西日本にも流入してきているというふうな例として、言えるのではないかと思います。」

次、スライドの鳥取 2 をお願いします。これは、岡山県の米田克彦さんの論文から引用させていただいたものなのですが、上から、前期、中期、後期といった分布を示しておりますけれども、前期が数少ないのに対して、中期、後期と、玉作りの遺跡の数が増加していき、なおかつ、日本海沿岸地域に広く分布する状況がうかがえるかと思います。先ほどから、お話にあるように、石の産地は限られるのですが、生産地はかなり広範囲に広がるというのが、弥生時代の特色の 1 つなのかなというふうにも思います。」

次、お願いします。弥生時代の中期の管玉作りのご説明を申し上げたいと思います。弥生時代の中期の管玉は、碧玉の大きな塊を最終的には、管玉1個体分の大きさにまで分割していくという作業が、まずありますけれども、その分割をする際に、擦り切り溝を施しまして、それを1個体分まで分割していくというのを繰り返して作ることを特徴としています。その溝が、画面下のほうにありますけれども、必ずこういった溝があるというのが、中期の特徴かというふうに思います。次、お願いします。この硬い碧玉を、擦り切り溝を入れていくわけなのですけれども、この画面左側にある、これが石鋸という工具です。これで擦り切り溝をつけまして、分割していき、四角柱から多角柱、さらには円筒形へと、砥石で研いでしだいに丸くしていくわけなのですけれども、その途中の段階で孔を開けねばなりません。硬い碧玉に孔を開ける道具は、実は、こういった石の針（錐）だったのですね。非常に細いものだということがお分かりいただけるのではないかと思います。

次、お願いします。これは、弥生時代後期の玉作りの例です。後期になりますと、作り方がちょっと変わりました、素材となる石に擦り切り溝を施さずに、直接、割っていくというふうなことで、大きな石からしだいに小さな角柱体へと加工して行って、最終的には、管玉1個体分の大きさにまでもっていく。さらには、砥石で研いで丸くしていくといった作業を繰り返します。画面の右下にありますのは、孔を開ける途中で、鉄の針で孔を開けているのですけれども、その鉄の針の先端が折れて残った例です。これから分かるように、弥生時代の後期になりますと、孔を開ける道具が石の道具から鉄の工具へ変わっているということが、お分かりいただけると思います。次、お願いいたします。これは、今お話しした弥生時代中期から後期の管玉の作り方を比較したものですけれども、上が弥生時代中期の作り方、それから、下が弥生時代後期以降の作り方になります。繰り返しますが、主な違いとしては、中期では石鋸という工具で、擦り切り溝を作って、石の針で孔を開けるのに対して、弥生時代後期以降は、石を打ち割って分割して行って、鉄の針で孔を開ける。こういった違いがあります。この後期に現れたこの技法が、後の古墳時代に受け継がれていくわけですね。

はい、次、お願いします。これは玉作り工房のご紹介です。鳥取県の西部に、国史跡妻木晩田遺跡というのがございまして、弥生時代の終末期の玉作り工房が1棟見つっております。赤で記しておりますのが、同じ時期に分布する竪穴住居跡なのですけれども、玉作り工房はここで、1棟見つかったのみです。ですので、鳥取県の場合は、弥生時代の一般の集落のなかの一角で、ごく小規模な玉作りが行われていたということになるかと思えます。右側にありますのが玉作り工房の図なのですけれども、中央に穴がありまして、その周辺から玉作りで出た碧玉のかけらがいっぱい出たといった状況ですね。次、お願いします。これは弥生時代後期の玉の素材、碧玉の変化を表したものです。左から弥生時代後期の前葉、後期中葉、後期後葉というふうになっていますけれども、後期の前葉は、まだどちらかというと緑でもやや灰色味を帯びた石が多いのですけれども、後期中葉になりますと硬質の花仙山産の碧玉がしだいに増えてまいります。後期後葉になりますと、

これはちょっと分析にかけていないのですけれども、見た目は花仙山の碧玉によく似たような石が主体を占めていくといった状況がうかがえます。山陰地方の弥生時代の玉作りの状況を見る限り、弥生時代後期の段階で花仙山産碧玉がすでに使われているといった状況が他の遺跡でもうかがえます。

次、お願いします。弥生時代にあっては珍しい水晶の玉作り遺跡を 1 つご紹介します。鳥取県にあります西高江遺跡では、玉作り工房が 7 棟見つかっておりまして、水晶のかけらがいっぱい出ております。こういったものを見ていきますと、水晶の原石から四角柱状に加工していくまでの過程が追っていけるのですけれども、残念ながらその後の工程がたどれないので、こういった種類の水晶玉を作っているのかが分かりません。弥生時代の水晶玉の例として参考までに、鳥取県久蔵峰北遺跡で出土した、弥生時代の切子で非常に珍しいものですか、島根県平所遺跡で出土した玉を掲げております。この下は、鳥取県で出た水晶製のそろばん玉ですね。こういったものも弥生時代はあります。次、お願いします。この西高江遺跡では玉作りの工具、水晶製の玉作りに鉄製の工具が使われておりました。先ほどお話したとおり、一般的な玉作りの村では、弥生時代の後期になってようやく鉄器化が進むのですけれども、ここの西高江遺跡と、京都府に奈具岡遺跡という遺跡があるので、ここでは硬い水晶を加工するためか、いち早くこういった鉄器を導入しているといった状況がうかがえます。

次、お願いします。弥生時代の玉作りは、玉作りだけを行っているわけではなくて、1 つの村のなかで、いろいろなもの作りが行われていたということのご紹介です。鳥取市の国史跡青谷上寺地遺跡は、こういった木製の華麗な容器がたくさん出土しております。あと、画面右下にあります、これは高杯の未成品で、これは別の遺跡から出てきたものなのですから、こういったものも、この青谷上寺地遺跡からもたくさん出ていますので、玉作り以外にも、こういった木器作りも行っていたということが分かります。次、お願いします。これは同じ、青谷上寺地遺跡で出土した骨角器ですね。左側にありますのは、鹿の角を鉄器を使って、まさに割ろうとしたものです。切れ目を入れて、ここから打ち割ろうとしているのです。これは、途中、未成品のものもありますし、こうした完成品、これは骨角製の装身具ですが、こういったものも作っていたらということもうかがえます。次、お願いします。これは妻木晩田遺跡から出土した鉄製品ですね。こうした鉄を裁断したかけらであるとか、遺跡のなかから、高温で焼けた炉の跡のようなものが何カ所か見つかっておりますので、遺跡のなかで、こういった鉄器作りを行っていたということが分かっております。

次、お願いします。ここで西日本の弥生時代の玉作りの特徴をまとめてみます。石の玉としては、勾玉はヒスイ製で、管玉は碧玉や緑色凝灰岩といった石、ともに緑色を基調とする石を使っているということが、1 つ特徴として言えそうですね。後期には、管玉の作り方に变化がありまして、それが後の古墳時代に受け継がれるということです。それから、山陰地方においては、弥生時代後期から、早くも（後の古墳時代に主流となる）花仙山産

の碧玉、これは島根県の花仙山という山から採れた碧玉を鳥取県まで運んできて、(玉の素材として)使っているということです。それから、弥生時代の玉作りの特徴の1つとして、いろいろなもの作りをやっている。そのなかの1つとして、玉作りをやっているということになります。それから最後に、碧玉の出土総量から見て、弥生時代の玉作りの生産規模は非常に小さい規模であろうということが分かります。青谷上寺地遺跡では、碧玉が比較的多く出ているのですけれども、それでも7.5kgということで、10kgにも満たないような量ですので、(古墳時代に比べると)生産規模も小さいですし、操業期間もおそらく短かっただろうということが言えるかと思います。以上のようなところが弥生時代の玉作りの特徴として言えるのではないかと思います。以上です。」

丹羽野氏「ありがとうございました。鳥取県では最近、非常にたくさんの弥生時代の玉作り遺跡が見つかっていまして、いろいろなことが分かっていますが、先ほど、施溝分割、溝を入れて作る石材、いわゆる、まだ鉄器が出る前の緑色の石がありました、あれはどこから来た石でしょう？」

小山氏「先ほどお話しした青谷上寺地遺跡というところで、碧玉が7.5kg出ているのですけれども、ここで出ている碧玉の約半数以上が、石川県の小松市周辺で採れる碧玉に似た石だということが分かっております。」

丹羽野氏「ありがとうございました。弥生の比較的古いときは、鳥取で北陸の石を使って玉を作っているのです。これもなかなか皆さん新鮮に思われると思いますが、今おっしゃったのは、鉄器が入ってくるってということによって、技術も変わるし、使う石も変わったってことですよね。その使う石が何に変わったかっていうと、近くにある島根県の、まさにその後の玉作りの中心になっていく島根県の花仙山の石になる。これは玉造温泉、まさに「玉を造る温泉」なのですけれども、ここにある山が花仙山。これから「花仙山」っていう名前がよく出てくると思いますので気を付けて聞いておいていただきたいと思います。鉄器が入ることによって、その碧色の石の玉作りが、わざわざ北陸から持ってきて石で作っていたものが、近くの硬い花仙山の石に変わっていくと。これはきっと、硬度が全然違うってことなのですね。昔から花仙山には良い石があって、でも、石では作れなかったけれども、鉄器が流通し始めることによって、おそらく技術も石も変わっていったのだということが分かるというお話だと思います。

それでは、弥生時代のまさにそのおおもと言っていると思います。一番、作られていたのだと思います。鳥取に石を供給していた石川県の伊藤さんのほうから、ちょっとそちらのほうの様子をうかがいたいと思います。」

伊藤氏「石川県は北陸なのですが、北陸のほうから山陰のほうに、碧玉が移っていった、移っていったのは碧玉だけじゃなくて、ヒスイも移出している地域であります。北陸のほうは、河村好光さんという方が集計されたものなのですが、弥生時代中期までは、北日本から西日本を中心に遺跡があるのに対して、後期になりますと、北陸のほうに遺跡がかなり集中していく様子っていうのが、見て取れるかと思います。これ、1点1点が遺跡1個ですの

で、遺跡の数がどう数えるかっていう数え方、県によって数え方が多少変わりますから、それでまた違うかなと思うのですけれども、石川県の中を見てみましても、やはり、遺跡の数はあまり変化しないという状況です。

次、お願いします。この北陸の石なのですけれども、ちょうど緑色凝灰岩という石の産地の分布するところのど真ん中にあるわけなのですけれども、古代出雲博物館のところから引用させていただきました。ありがとうございます。こちらの下もそうなのですけれども、もともと北陸のほうは、西川津技法といいまして、島根県さんの報告にありますけれども、あちらの技法がまず石川県のほうにやっけてまいます。同じように溝を切って石を割っていく、そういった技法がもともと、どうも山陰のほうから来たようだ。ところが中期になって、今度、西日本の大中の湖南技法というものが入りまして、同じ施溝分割という技法なのですけれども、ちょっと違う技法が入ってきている。この技法が根づきまして、北陸のほうに1つ大きな産地を作ったということになります。ですから、もともと山陰のほうから来ながら、その技術は根づかずに西日本の別の技法で作ったということになります。

次お願いします。それで、原石はどういう状態にあるのかっていうことをまずご紹介いたしますと、これは原石のある場所です、これを明かすと私、石川県に戻れません。なぜかといいますとこの石を求めて、好きな方がいっぱいいらっして、荒らしてしまうのです。これが緑色凝灰岩の原石で、人の頭ほどあるのですけれども、こういう川のところにいくつか転がっております。どうも、どこかに露頭があって、それから土砂崩れか何かで崩れて、そういったものが川の中に点在している。おそらく弥生時代の人たちはこういうところから、石をとってきたのだろうというふうに推定しております。

具体的にどのようなふうに使っていたかっていうのを、次のスライドでお見せしたいと思います。こちら石川県を代表します弥生時代の遺跡です、八日市地方（じかた）遺跡という国指定の史跡になっております。こちらでは非常にたくさんの玉の製品が出ておりまして、数を報告書の中で全部数えております。それを拾ってみますと、石材が全部で**537kg** あまり出ている。そのうちに、原石類ですよ、それが**142kg**。それから原石をさらに細かくして、いざ作りだそうという石核と私どもも言っていますが、そういった素材も合わせまして、約**42%**、半分近くの重さのものが、こんな原石の状態である。ですから、非常にたくさん玉を作っている。今、推定しておりますのは、青谷上寺地遺跡に行った碧玉っていうのは、どうも八日市地方遺跡、そこら辺の遺跡で採取して、ストックしたものがいろいろな文化の流れ、物流の流れで山陰のほうに行ったのだろうというふうに考えております。

次、お願いします。こちらが展示してある状況ですけれども、こういうように、自然の面が残ったもの、これは原石ですよ。それから、こういうように四角く形を整えているもの、こちらが石核というものになって、それからさらに、施溝分割、溝を切って割っていくという作業に移っていきます。次、お願いします。こちらがそれを具体的に示した資

料でして、鳥取県さんの図録から引用させてもらったのですけれども、このように溝を紅簾片岩という石で切っていくまして、ここに、くさびを入れてパカンと割っていきます。こういう四角い、キャラメル細長いものとも言いましょうかね、そういったものを、今度右側について、角柱体、最初は四角柱から八角柱、十二角柱と、こういったものを作っていきます。それからさらに孔を開けていきます。孔を開けるにしても、いろいろな各種の針を用いまして、最初は、メノウの石針でこういうあたりをつけます。あたりをつけて、石針錐を使っていくのですけれども、それも孔の大きさを大きくするもの、それからさらに、進行していくものと、複数の工程が分かれるようです。

次、お願いします。今までは、管玉だったのですが、北陸はヒスイ産地ということでして、ヒスイの勾玉も作っているということをご紹介したいと思います。こちら、富山大学の高橋浩二さんという方が作られた分布図なのですが、この黒いところ、黒い点々が弥生時代にヒスイの勾玉を作っていた遺跡です。やはり作り方も、弥生時代ですので、施溝分割という方法で作っております。ここに溝を彫りまして、そこで2つに割っていく。作った勾玉が、こういうドーナツを半分にしたような形で、特徴的な勾玉を作っております。ちょっと難しい言葉で半珠型勾玉、こちらに書いてありますが、半珠型の勾玉というように、名前で呼んでいます。たいがいこの形の勾玉を見れば北陸だなどというふうに、これから博物館でご覧になったら、ここに北陸の玉があるというふうに思っただけだとありがたいと思います。

最後に、次、お願いします。山陰でも後期になると、作り方が変わったように、北陸のほうでも作り方が変わってまいります。どう変わってきましたかと言うと、やはり鉄器を使いだします。山陰のほうは、硬い石材に対応するために鉄器を使ったということですが、北陸のほうは、そういうことではありませんで、より軟質な石材、より柔らかい石材で作っていくのに、どうも鉄器をたくさん使っているようです。こちらがその鉄器のいくつかですけれども、ここに斧があったり、ここに刀子があったり、これは鉄の針です。これはタガネのようですね。ですから、こういうように、鉄のいろいろな道具を使って、より柔らかい石材でたくさん作っていった。これが北陸の玉作りの弥生時代の様子かなということをご紹介いたしました。」

丹羽野氏 「ありがとうございました。もとは、どうも北陸の玉作りが、山陰の玉作りの根源かと思えば、どうやら一番初めはやっぱり山陰だったという、ちょっとびっくりいたしましたけれども、しかも、同じ頃にやっぱり鉄器を使うことによって、技術が変化しているのですけれども、北陸と山陰では、その技術の変化の仕方の性格がまったく逆だっているのも、非常に面白い話でしたね。これ、古墳時代に結局、何かつながるのだからって言うのが後で分かってくるのですけれども、せっかくなので、島根の岩橋さんに、根源のおおもとの、島根の玉作りの話をちょっとしてもらいましょう。」

岩橋氏 「弥生時代の玉作りについては、鳥取県さん、それから石川県さんのほうから説明していただきました。少し補足をします。弥生時代前期の西川津遺跡という島根県松江市北部に



ある遺跡で最初の擦切技法が始まるわけです。画面のほうは、4 番をお願いします。鳥取県や石川県でも、弥生時代の玉作りは、この石鋸を使用して直方体に成形した素材剥片の表面を擦って、浅い溝を入れていきます。その溝に沿って分割していくという方法を紹介されました。その原点にあたる方法が、西川津遺跡で弥生時代前期から行われております。ただし、この遺跡で使用された石材は、碧玉ではありません。緑色凝灰岩という、少し軟らかい石ですね。石鋸で溝を入れていけるのは、緑色凝灰岩というちょっと軟らかい石でないとは出来ないので、島根県内でも前期・中期については、こういった、施溝分割技法を用いて玉作りを行っております。この技法が、東方の鳥取近域、それから北陸へ影響を与えていくということを、まずご理解ください。

そして、弥生時代中期～後期については、小山さんの紹介のとおり、鳥取県地域とほぼ同じなのですが、特に後期には、鉄素材の道具が普及してきます。つまり、ノミやタガネなどで、硬い碧玉を加工出来るようになります。その段階で、花仙山産の硬質な石材もようやく利用出来るようになるわけですね。特に島根県の出雲地方は、九州北部と交流が盛んで、福岡県の糸島―伊都国ですね。魏志倭人伝に記される伊都国があったと思われる地域に、潤地頭給遺跡という遺跡がありますが、そのような九州北部の遺跡でも、島根県の花仙山産の碧玉が運ばれて、現地で玉の製作が行われています。また、北九州市の城野遺跡でも同じように、花仙山産の碧玉が運ばれて現地で作られておりますので、出雲地域と九州北部というのは非常に関係が深く、また、九州北部で作られた玉類は朝鮮半島との交易にも使われたと考えられております。以上です。」

丹羽野氏「ありがとうございます。どっちかって言うと、同じ施溝分割でも、島根県側のほうは、板にするのですよね。まず板にして、板をこう切っていくような感じ。ところが、北陸の施溝分割になると、どんどん、サイコロを小さくしていくように割るといって、同じ施溝分割でも違いがありまして、これがまた、石と技術が一体化しているというところに、弥生時代の面白さがあるんじゃないかと思います。それで、今、玉作りに関して言うと、鳥取から北陸まで1つの石で、1つの技術でというのがあったんですけど、これは先ほど伊藤さんが、さまざまな物を作るいろいろな交流のなかで、共有したものだろうというお話だったと思います。一方、今岩橋さんが、後期になって九州に出ているって、これはどういう形なのでしょうね？九州で玉作りが行われたってというのは。何か考えがありますか？」

岩橋氏「九州北部の福岡県や佐賀県では、同じ時代の山陰地方から運ばれた土器というのも多く出るわけですね。ですので、九州北部を経由して、山陰地方は朝鮮半島と交流、交易をしていたとも考えられております。現に島根半島沿い、特に出雲市などでは、朝鮮半島製の土器もそれなりの数が出土するわけです。ですので、玉を交易の交換財として使っていた可能性も考えられると思います。」

丹羽野氏「玉作り自体はどうなのですか？九州の人が作ったのですかね？」

岩橋氏「もちろん、山陰系土器は九州北部でも出ておりますので、山陰から工人が原石を携えて、

出張して、九州の現地で作ったというふうに考えております。」

丹羽野氏 「 ということで、どうやら、弥生時代のあり方っていうのは、地域地域によって、石によってさまざまな形をもって、その山陰地方の石なんかを見ると、まるで、フリーメイソンのような、あんまり固く誰かに強く支配されてというイメージではあんまりなさそうですよね。それから、こうやって分割していつて作る石、管玉なんか特にそうなのですが、非常に細くて小さいっていう特徴が1つあります。もちろん例外はありますけれども、一般論から言うとそういう特徴であると思っています。

という弥生を概論したなかで、いよいよ古墳時代の話になってくるのですが、まず、古墳時代になると、どんな玉が出てくるのか。作られるのかっていうところから始めても良いのですが、一番よく分かるのは、製品に何があるかっていうことから見るのが、一番分かり良いので、古墳時代になって、まず、古墳時代の前期でも古いところあたりでは、どういう玉が古墳に出てくるのかっていうことを、やはりこれは大和が一番分かりやすいと思いますので、奈良のト部さんから、ちょっとお話をいただきたいと思います。」

ト部氏 「 奈良県の一番古い古墳にどういう玉が入っているかというご質問なのですが、具体的に古墳の名前を挙げますと、ホケノ山古墳、中山大塚古墳、あるいは、三角緑神獣鏡が30枚以上出ました黒塚古墳、これらの古墳には、玉というのは入っていないというのが実情です。従いまして、楢山先生の話にありました、玉、剣、鏡ですね、そのうちの玉というのは、古い古墳には入っていないというのが実態です。おそらく、当時の王は、玉というのは持っていたと思うのですが、習慣として古墳の中には入れていないというのが実態です。それが古墳の中に入れられるのは、それらの古墳よりも一世代ぐらい下がりまして桜井茶臼山古墳、あるいは下池山古墳、そういった古墳に玉は入っています。

奈良県資料①の写真が下池山古墳なのですが、左上がヒスイの勾玉、それと碧玉の管玉です。先ほど丹羽野さんからお話ありました、弥生時代の細長い玉とは違う少し太い管玉が出ています。そして、下のほうにはガラス玉があり、こういうのがセットとして入っているというのが実態です。次の奈良県資料②には、それとともに碧玉製の石製品が出ております。写真の左にありますのが下池山古墳の石釧、腕輪形の石製品です。こういったものが出てくるということです。

したがって、玉生産の実態というのは、古い古墳からは分からないというのが実情なのですが、そのときに参考になるのが、写真右側にあります、纏向遺跡から出ております、巴形の石製品というものであります。ここに4つ突起があります。本来ですとこれを角状に突き出して製品に仕上げるのですが、この場合は未成品の状態、この部分が折れてしまって途中で製作を止めてしまっているのです。この石材が北陸産の碧玉、あるいは緑色凝灰岩というものであります。そして、この石製品が出てくる時代が土器の形式で言いますと、布留の0式で、古墳で言いますと箸墓古墳が作られた時期に該当する、そういうものであります。したがって、遠隔地から石材を王権の中核に運んで、そして、そのもとで作っているというのが確実な状態、そういうことが分かっております。」

丹羽野氏 「 ありがとうございます。どうやら古墳のあり方からすると、一番古い古墳には副葬する習慣がないけれども、次の世代からは非常に良い玉を副葬するようになっていく。かつ、ぱっと見ても分かるのですけれども、弥生時代の玉とはちょっとこう、特に管玉なのですが、非常に太く、そういうものによって変わっていくというようなこと。それと、石釧とかいう腕輪形の石製品だとか、石で作った模造品っていうのが出るのでですね。これが弥生時代にはまったくない製品でして、これがどういう経緯でどういうふうに使われたかっていうのは非常に謎ですけれども、後で出てくると思いますけれども、たくさん古墳から出てきたりします。たぶん、こういう模造品っていうのは、何かの権力の象徴的な意味で、今のト部さんの話から聞くと、最初はやっぱり大和王権の中核でこういう複雑な非常に上質な物が作られた可能性が高いことをうかがわせる資料じゃないかと思います。それでは、古墳時代になって、弥生時代で一番大きな産地であった北陸はどういうふうになっていくのかっていうことをお話していただきたいと思います。伊藤さんお願いします。」

伊藤氏 「 北陸のほうは、弥生時代から古墳時代に変わりまして、玉の生産がかなり変わってまいります。石川県の 9 をお願いできますか？ こちら、白い四角が弥生時代後期の玉作りの村です。この黒い点が古墳時代前期の遺跡です。どうも見事なまでにこの遺跡が重ならないという様子が見て取れると思います。特に、石川県の一番南のほう、片山津温泉で有名な片山津なのですけれども、片山津温泉の近くに、片山津玉造遺跡というのがございます。先ほどの梶山先生のお話にも学史として出てまいりましたけれども、ここの遺跡と 5km ほど離れて二子塚遺跡というのがあります。この二子塚遺跡がどうも片山津の玉造遺跡と非常によく似ているということが分かっています。よく似ていると分かっているのですけれども、遺跡自身はその場所として動かない、移っているということです。それからもう 1 つ、北のほうになりますけれども、こちら塚崎遺跡という遺跡で、弥生時代に作っていたのですけれども、どうもその中心が、金沢市の海浜部ですね、この辺りに移っていく。こういうように、弥生時代の玉を作っていた集団と、どうも違っているということが明らかになってまいります。ただ、古墳時代のどこからだろうというのが、今のところ、まだまだ玉研究のなかでは議論のあるところで、古墳時代前期でもかなり初期じゃないかと。私はその立場ですが、いや、そうじゃない、もうちょっと新しくなってからじゃないかという意見もたくさんございます。結果として、石川県、北陸のほうでも玉の生産のあり方が、どうも影響を受けているということは、確実なようです。」

丹羽野氏 「 ありがとうございます。それでは、もう 1 つ、山陰側はどうなのでしょうね、古墳時代になってどういう様子ですか？」

岩橋氏 「 はい、画面のほうは 5 番をご覧ください。弥生時代後期に、わりと山陰、出雲の広い範囲にわたって、玉作り遺跡があったのですけれども、古墳時代前期の前半になりますと、この花仙山の周辺に、画面上青いドットが 3 点ほど落ちていますが、花仙山の周辺に玉作り遺跡が集まってきます。この時期の生産の状態はよく分からないのですけれども、作っている品目は碧玉製管玉ですとか、碧玉製の勾玉も一部作っているようだけれども、あ

まり量は作っていないようです。それから、石川県のほうで話題になりました、腕輪形の石製品など、奈良県の前期古墳でたくさん出てくるものですが、あぁいった腕輪形の石鉏ですとか、鋤形石、あるいは車輪石、そういった石製品については、かつては島根県で作っているという説がありましたが、それは亀甲状石ですよ。直径が 10 センチ強ぐらいの円盤状の石が、2 点ほど、島根県、花仙山の周辺で発見されていますが、そういったものの存在を元に、腕輪形の石製品を作っているという説がありました。ですが、最近の研究や発掘状況を見ますと、どうも古い石鉏や車輪石、そういったものは花仙山産の石ではなくて、どうも石川県産の素材を使っているということが分かってきました。ですので、腕輪形の石製品については、最初の原石をある程度加工した段階で、出雲から奈良盆地、あるいは大阪湾の周辺に出荷して、大陸系の技術ですね、腕輪形の石製品には大きな孔が開いていますが、そういった大きな孔を穿孔する技術は出雲にはありませんので、そういう技術がある大和周辺に持って行って加工したのだというふうに考えております。」

丹羽野氏 「はい、ありがとうございます。この時代になって、北陸は遺跡の様子からしても、かなり大きな玉作り体制の変化があったという話です。山陰のほうは、そんなに玉作りがどんどん行われているような様子じゃないというようなことで、どうも古墳時代の早いうち、大きな古墳というものを大和が中心になって作りあげたころというのは、どうやら、これは何か大和が中心になって、この玉っていうものを何かしら政治的なものに仕立て上げようというような、そんな匂いがするのですけれども、この時代になって石川のほうでの技術的な何か変化はありますか？」

伊藤氏 「玉作り自身では、そんなに大きな変化はありません。同じように鉄製品でつくっていますし。違う点と申しますのは石川の写真 8 ですね。こちらにあります勾玉に囲まれた大きな管玉がありますけれども、これは長さが 10 センチ近くあるような非常に大きな管玉として、奈良県でいきましたら桜井茶臼山古墳に出ているような玉杖の軸に使ってもいいような石材です。したがって、石製品をつくり得るような技術的な基盤というものは、もう古墳時代直前に確立していたということが言えるかと思えます。」

丹羽野氏 「ありがとうございます。どうやら古墳時代になって、大和が中心になって、何かちょっと玉作りに変化を起こさせているような匂いがしてきて、それがどうも北陸を巻き込んでいるというような感じです。時間がどんどん過ぎますので、もっとこの辺りを深めると面白いのですけれども、今日は玉作りということなので、あまり政治体制の話には行かないようにしたいと思います。」

それでは次の画期がどこにあるかということを考えてみたときに、先ほど楢山先生の話のなかでも、ちょっと赤い玉の性質のことが出てきました。基本的に弥生時代の玉っていうのは、石の玉っていうのは緑っていうのが基本で楢山先生も緑は重要だっておっしゃってましたよね。そういうなかで、ちょっと変化が出てきます。その辺りは、また奈良のト部さんから、ちょっとお話をいただきたいと思えます。」

ト部氏 「また古墳の資料になりますが、それを一番端的に物語るのが、奈良県資料③の写真に出

ております、新沢 500 号墳と呼んでおります前方後円墳であります、この右側の写真で、上のほうでヒスイの勾玉が出ております。右側が水晶の勾玉、下に行きますとメノウの勾玉が出ています。色で言いますと 3 種類の勾玉が出ています。よくよくご覧いただきたいのですが、ヒスイの勾玉には、勾玉の頭の部分に丁字という細い線を入れており、伝統的な勾玉です。それに対しまして、この新しい水晶、メノウの勾玉にはそういう細工は施されていませんので、こういうことが端的に物語っているかと思えます。それがこの新沢 500 号墳の副葬品のなかの一部であります、じゃあ、なんでこういうものが出てきたかということなのですが、実はこの副葬品を見ると、この勾玉だけではなくて、たとえばここに筒型銅器と呼ぶ青銅製品があります。あるいは緑色凝灰岩製の腕輪形の石製品、こういったものが新しい要素として、古墳の副葬品に入っている。そういう変化のなかの 1 つの要素であるということでもあります。これがどういう契機で出来たかという時代的に合うのが、王墓や大王墓の移動でありまして、この時期に奈良盆地の東南部から北部、佐紀の地域に 200m 級の前方後円墳が移動します。時期的には、この大王墓の移動、それを契機として、こういう新しい副葬品が作られた。その 1 つの要素として新しい玉も副葬品としたということが言えるかと思えます。」

丹羽野氏 「 ということで、いよいよ、古墳の玉の本番になってきました。時間がだいぶ過ぎてから古墳の玉の本番になって、ちょっと苦しみ始めました。ちょっと、ここでしばらく沈黙が続いておりました、私たちの、この 14 県の担当者のアイドルなのですけれども、山田琴子さんに登場していただきたいと思いますが、ああいった石がどういうふうに使われたかというのが、関東の事例で分かるものがあるので、ちょっとそのこととお話いただけますか？」

山田氏 「 スライドの埼玉の 19 をお願いします。玉作りの話の前に、玉をどのように使っていたかということが分かる例として、これは埼玉のものではなくて申し訳ないのですが、群馬県太田市の塚廻り古墳から出土しました、巫女型の埴輪、こちらのほうを見ていただきますと、首元にはネックレスを二重にしてつけているのが分かるかと思えます。先ほど、榎山先生のお話にもありましてとおり、勾玉の先が正面を向くようなかたちでネックレスに形作られています。また、両腕を見ていただきますと、右腕は、丸いブレスレットになっていますが、左腕のほうは丸玉ですね。こちらを連ねて、一連のブレスレットにしてつけています。また、足元ですけれども、こちら両足ともにおそらく二重にして丸い玉を連ねて足輪にして、全身に身につけている様子が見えていただけるかと思えます。こちらですが、6 世紀ということで、古墳時代前期からはちょっと時間が経っているのですけれども、おそらく古墳時代を通じて、このようなかたちで玉類を身につけて、皆さん、使っていたんじゃないかなというふうに思います。その隣に写真が 2 枚あるのですけれども、これも埼玉県内の古墳から出てきた玉類です。これは両方とも、やはり 6 世紀後半ということで、ちょっと時代が経っているのですけれども、実際に埼玉県寄居町にあります、小前田古墳群というところから出てきたものになります。メノウの勾玉とガラス玉、こちらのほう

がセットになって出てきました。こちらも復元するとこのようなかたちで、勾玉が正面を向くようなかたちで使われていたんじゃないかと思います。また、行田市にあります築道下（つきみちした）遺跡、これは古墳時代の住居から出たものになるのですが、こちらも碧玉の管玉、これがガラス玉と一緒に、セットになって出てきました。古墳の被葬者だけではなくて、住居にもこのようなものが入っていたということで、古墳時代後期になりますと、身分の高い人から、普通の竪穴住居に暮らしていた人まで玉類を使っていたのだなということが分かるかと思います。」

丹羽野氏 「ありがとうございます。具体的にはこういう使用例があるということで、ちょっとイメージが出来たんじゃないかと思いますが、いよいよ、この赤い玉、白い玉、青い玉って、前期の後半に3色そろうのですね。この3色、赤、青、白という3つの玉というのは、実は重要な古墳時代の要素でありまして、これはあとまで続くのですけれども、梶山先生、何かご意見があります？ この3つの色というのは、なにかその後のいろいろなことに対して。」

梶山氏 「さっきも言ったように、確かに古墳時代の古いところでは赤い玉はまず少ないだろうと思います。出雲の伊部の玉作り辺りで、実際に灰のなかから出てくるということは、赤メノウを赤くするための操作のもので、そういうのが出てくる段階で、初めから赤は赤くしようとしているのです。ですから、赤という色を強調しようとしていることは事実です。そうすると、それまでの青で来ているものをどうするか。それと、あとの白は、本当の白ではなくて水晶です。白い石を使おうと思えば、花仙山にいくらでも碧玉の白がありますから、そんなものを使えばいいのですが、それは使わないです。水晶は透きとおっていますから、白と言えるかどうか、これは一つ問題がある。確かに、水晶は弥生時代から出ている。算盤玉といって、棗玉（なつめだま）は、古墳時代後期になれば稜線が出てきて、切子玉になっていきますけれど、そうでない棗玉的なものは弥生からずっと出てきていますので、そういうのをそろうと言えるかどうかですよ。」

出雲の北島の国造さんの家には、御統（みすまる）の玉といえるかどうか、玉をつないだものがまだ残されていますけれど、いつの玉か見ろと言われて見たのですけれど分からない、中世かなという程度しか私には分かりませんでしたけれど、その中には、いろいろな色の玉が使っていることは事実です。だから、あとになるといろいろな玉、なかには、実は木の実の玉もあつたりするのです。木の実とか草の実とかそんなものも入っている、そういうようなこともあるので、今、色は青、赤、白と言われましたけれど、朽木の玉、木が泥炭化というか、土のなかで黒くなった、その玉も結構古墳時代に使っていますし、あるいは、琥珀の玉は、これはいつから使っているかということ、ちょっと面倒くさいのですけれど、縄文にも琥珀はいくらでも使っています。けれど、逆にいうと古墳時代では後期だろうと思います。だから、古墳時代後期ってというのは、そういう種類が増えて、それから、色の種類もそこで増えているかもしれない。それに、そのときに使っている人たちの精神的な面で変化があるかどうかは、これはかなり微妙だと思いますけれど、ないとは言えな

いと思います。」

丹羽野氏 「はい、ありがとうございます。今の話は後期の話でありましたけど、この3色の玉が出そろるのは、前期の後半ぐらい、4世紀の半ばぐらいに登場するんですね。ト部さんがおっしゃったように、それが大王墓の移動と連動しているということなわけですけれども、たぶん玉そのものはもう出雲の玉で間違いないと思います。それがなぜ出雲の水晶やメノウの玉が急増するかっていうことと、何か関連することがないかなということ、ちょっと思うのですけれども、鳥取の小山さん、ちょっと意見があるようですので、お願いしたいと思います。」

小山氏 「久しぶりに出番が回ってきました。古墳時代の前期の後半という時期は、この鳥取県の首長層はいろいろな各地とのつながりを持つようとしているんですね。鳥取のスライドの16をお願いできますでしょうか。画面の左側が「因幡型円筒埴輪」といまして、下半分は普通の円筒形をしています、上の口がすぼまる形の、壺を載せたような形。とても特殊な形をした円筒埴輪です。鳥取の東部のほうで出てくるのですが、同じ時期に、実は遠く離れた京都府丹後半島でも同じような形のものが出土しています。こちらでは「丹後型円筒埴輪」と呼んでいます。日本中探しても、この丹後とこの因幡とっている鳥取県の東部しか出土しません。

次に鳥取の17をお願いいたします。これは、右側が先ほどト部さんのほうからご説明がありました、新沢500号墳から出土したものですけれども、左側のように実は同じようなかたちをしたものが鳥取県でも出土しております。八ツ手葉形銅製品と呼んでいます。最近では突起付重圏文鏡という鏡の一種というふうな位置付けもされるものですが、これを並べてみると、本当にもうぴったり合わさるくらいそっくりです。最近の研究では、この圏線といわれるこの文様とか、あと、この櫛歯文というこの文様の幅なんかは微妙に違うので、多少鋳型を作り直したものでつくったか、あるいは非常によく似た鋳型で作られたものではないかと考えられています。似たものを日本中探してみても、この2つしかありません。

次の鳥取の18をお願いできますでしょうか。今のこの埴輪と、この八ツ手葉形銅製品、これを見ますと、鳥取県の東部の首長墓とこの丹後で、非常に共通した埴輪を持つということ、それから、鳥取県の東部の古墳と、奈良県の古墳から同じようなものが出土してくるといったことからして、この山陰と大和、あるいは山陰と丹後半島というなかで、非常に密接なつながりがあったらうということがうかがえると思います。おそらくは、直接、山陰と大和がつながりをもつというよりも、むしろ、大和からこの丹後半島を経由して日本海ルートでつながっていたのではないかと考えられます。最近、この但馬という地域でも、因幡型円筒埴輪、あるいは丹後型ともいわれるような折衷型の埴輪が池田古墳というところから出土しております。ちょうど、この辺りですね。ちょうど、そういった日本海ルートをつなぐところで出土しているということからしても、そういうことが言えるのではないかと思います。」

丹羽野氏 「ありがとうございました。今いわゆる埴輪の話が出ましたけれども、実は出雲でも上野1号墳と書いてありますけれども、これは大和北部型という似た埴輪がやっぱり出土していて、佐紀盾列古墳群とほぼ同じような埴輪が、この4世紀後半になって出てくるのですね。しかも、出雲は、最初の古墳は方墳なのに、初めて前方後円墳をまさに同じ時期に作り始めます。非常に大和との関係性を近づけるのも同じ時期なのです。当然岩橋さんに聞くまでもなく、出雲ではこの時期玉はたくさん作り始めているということだと思いますよ。」

岩橋氏 「そうですね。この古墳時代前期後半の時期に、この3色の玉ですね。メノウ、それから碧玉、そして水晶。この3種類の石材を使った玉生産が始まります。ただし、出雲の花仙山周辺に集中して製作工房がありますので、花仙山の周辺で集中的に作っているという状況です。作られた玉は、先ほどの新沢千塚500号墳のように大和のほうへも運ばれております。それから、先ほど紹介がありました、上野1号墳という宍道湖のちょっと南西側の方に造られた古墳ですけども、16番の画面、上野1号墳の出土玉類ですが、真ん中のメノウの勾玉などは新沢の500号墳とほぼ同じような、非常に大きくて成形・調整のきれいな玉です。こういった玉類を生産しております。」

ただし、花仙山周辺の有力な古墳には、こういったメノウや水晶の勾玉が副葬されてはいないのです。だから、花仙山周辺で、玉類を作った集団は、おそらく大和のほうに、いったん玉を貢納している。それから王権によって再分配されているのではないかと考えております。」

丹羽野氏 「はい、ということで、どうやら4世紀の半ばぐらいから日本海ルートというのが非常に大和の王権にとって重要になってきて、そういったことも絡み合いながら、おそらく大陸との関係なんかも絡んでくるのでしょね。そういうなかで、こういう新しい玉の文化がいろいろな古墳文化の変容とともに訪れていて、そこで出雲っていう地域が、すごくクローズアップされてくるのが、やっぱり、前期でも後半だということでございます。」

もう1つ付け加えますと、海の祭事である沖ノ島でのおまつりが始まるのも、だいたい同じような時期です。出雲大社でも、やっぱりこの4世紀後半ぐらいにきれいな、このメノウの勾玉が出ていますよ。そういうようなことも含めまして、大きな変革があるんじゃないかな。いわゆる大和のなかでの政体の変革や流通といったものの変革と連動しながら、こういう3色の玉が出て、全国的に流通していくというような状況だと思います。」

ということで、次に5世紀、中期になって、それじゃあどうなるのか。玉作りはどうなるのか、そういったことを、ちょっとその当時の大和の王権の様子を絡めてト部さんのほうから、ちょっとご説明をお願いしたいと思います。」

ト部氏 「それでは、曾我遺跡についてご紹介させていただきます。曾我遺跡は、奈良県資料④に出ていますけれども、少し色を塗って赤線で囲んだ部分であります。横に曾我川が流れておりまして、向こうに、天太玉命（あめのふとだまのみこと）神社という非常に意味深



な神社があります。向こうに見えていますのが畝傍山、ちなみに、私が勤めております橿原考古学研究所はこの場所になります。曾我遺跡はこの道路工事に伴って発見された遺跡でありまして、これが1982年、ざっともう30年以上も前でありまして、新規に発見された遺跡であります。

奈良県資料⑤の右側の写真に出てきた石材、製品、原石写真があります。この写真がすべてを物語っております。滑石、ヒスイ、碧玉、グリーンタフ、水晶、琥珀、片岩もろもろですね、これらはすべて曾我遺跡に集められて、そこで作っているということでありまして。ちなみに、今ここで話ししています4県のうちで、玉の原石が出ていない県というのは、私の奈良県だけでありまして、奈良県内からは玉の原石というのは出ない、遠隔地から運んで曾我遺跡で作っていると、それが実態なのです。ただ注意しなければいけないのは、写真には色とりどりの玉が見えておりますけれども、作っている玉の8割強というのは滑石製の白玉です。平たい玉ですね。それをメインとして作っていたということでありまして。それと左側に地区別と時期別の変遷がありますけれども、すべて同じ石材で同時に「用意ドン」で作っていたわけではありまして、大きい遺跡のなかでそれぞれに変遷があるということです。一番最盛期が5世紀の後半であります、最初に作り始めたのは4世紀の後半から作り始めています。そのなかには出雲産の碧玉を使っているということも確認しております。

次、奈良県資料⑥をお願いします。そのなかで古い時期の遺構ではありますが、左側に坑が見えております。曾我遺跡の玉というのはこういう坑の中から、あるいはこの坑にかぶっていた土、包含層から出土しました。先ほど、楢山先生のお話のなかには玉というのは住居址で作っていたという話が出てきましたけれども、曾我遺跡の場合は、そういう住居址というのは発掘調査では1棟も出ていないという状況です。したがって、この坑の中に製品、あるいは未成品のものが捨てられていたというのが状況です。右側の土師器がこの坑の時期であります、須恵器はまだ出ていない時期から曾我遺跡では作られていたということでありまして。

次、奈良県資料⑦をお願いします。左側は、古墳時代中期の中葉でありますけれども、やはり同じく浅い坑ですね。この時期からは琥珀、そして水晶とヒスイ、そういうものが加わっています。この時期で、ほぼ曾我遺跡で作られる玉というのはすべてそろえられており、従いましてはそこで生産体制が整えられるということになります。右側に土器がありますが、この上の須恵器ですと、5世紀の中葉ぐらいということが分かります。

次、奈良県資料⑧をお願いします。同じく曾我遺跡の遺構の写真であります。中期の中葉から後半にかけてのSX-200に、へそ石が出ているということを書いております。へそ石につきましては、次の奈良県資料⑨の写真なのですが、これなのです。円錐形の割れた石でして、管玉に孔を開けるときに片方から開けた場合に、その反対側の石が割れて円錐形になります。そして真ん中についた孔がまん丸でおへソのような形になっています。ですから管玉は製品としては出てないけれども、このへそ石が出ていることによって碧玉の

管玉を作っていたということが分かります。そのへそ石をよくよく見ますと、1 cmぐらいの大きいへそ石と、5 mmぐらいの小さいへそ石が2種類あるということでもあります。その大きさは何を示すかと言いますと、その孔を開けるタイミングですね、左の写真のように荒割りの段階で開けているものと、右側のある程度研磨した段階で開けていくものがあります。そういう2つのタイミングがあったということでもあります。もともと、このへそ石が出る片面から開ける片面穿孔というのは出雲で出来た技法なのですけれども、それが大和に伝わったということでもあります。その下の写真、これは水晶、メノウなのですけれども製品を作ったときの割れたチップであります。ただ、このチップを見ますと出雲の遺跡から出ているものに比べますと少し小さいのですね。そういう違いがあるということです。それと確かに出雲の石を使っているのですけれども、それ以外に、出雲ではない碧玉も使っています。出雲ではない碧玉にもこういうへそ石が出ているということで、石材そして技法、そういったものが、非常に複雑に混ざり合って、そしてある程度の変遷のもとで作っていたということが言えるかと思うのですけれども、その具体的な作り方っていうのはまだよく分かっていないというのが現状であります。」

丹羽野氏 「ありがとうございました。ちょっと私1つ大事なことを忘れておりました。5世紀の前半ぐらいから始まるということなのですが、ちょっと時間を戻してもらって、実は前期の後半にもう1つ大事なことがあって、関東でも玉を作っているということが最近調査で分かってきておりますので、日本海、日本海と言っていましたけど、実はこの東国でも玉を作り始めているということが分かってきました。ちょっとそのことを山田さんにご報告いただきたいと思います。」

山田氏 「関東の玉作りということでまず埼玉県内の状況についてお話したいと思います。資料の私の原稿(p9)のほうに、玉作りの埼玉県内の状況については一応まとめてありますので詳しい内容についてはそちらをご覧くださいと思いますが、1点だけ訂正させていただきますと、9ページの第2段落と言いますか、埼玉県内の玉作り遺跡という段落のなかの5行目、反町遺跡と前原遺跡で緑色凝灰岩の管玉、勾玉を作っていたというふうに書いてしまったのですが、失礼しました、こちら2つの遺跡とも、緑色凝灰岩の管玉しか作っていません。こちら訂正してください、申し訳ありません。

埼玉県内の古墳時代前期の玉作り遺跡なのですけれども、反町遺跡、それから正直遺跡、前原遺跡という3つの遺跡が見つかっています。スライド埼玉の3をお願いします。東松山市、お聞きになった方もいらっしゃるかと思うのですけれども、反町遺跡ですね、こちらが古墳時代前期、埼玉県内で最大規模の集落遺跡になります。大量の土器、木製品のほかに玉作り工房が2軒見つかっています。そちらのほうから緑色凝灰岩の管玉、それから水晶の勾玉、メノウの剥片が出ているのですけれども、おそらくメノウの勾玉も作っていたんじゃないかと思います。

スライド埼玉の4をお願いします。こちらが東松山市から荒川を隔てて東側にあります桶川市になります。桶川市の前原遺跡というところ、大宮台地上に位置している集落遺跡

なのですが、こちらからも緑色凝灰岩の管玉、それから水晶製の勾玉、メノウ製の勾玉、砥石と鉄の針などの玉作りの道具が出土しています。こちらのほうで前原遺跡 5 号住居出土の石製品の未製品ということで、北陸石川県などでも作られていたという石製品、これを緑色凝灰岩で途中まで作ったものが見つかっています。それから、その下に前原遺跡のほうから水晶製の勾玉とメノウ製の勾玉、これまた途中までしか作っていない、まだこれからまだまだ磨けば勾玉になるような状態のものなのですから、15 点ほど集められて、床下の浅い土の中に埋められていました。

埼玉の 5 をお願いします。最後に、埼玉県川島町にあります正直遺跡というところ、こちらのほうですが昭和 54 年に農業用送水管の工事のときに工事が途中まで終わってしまった状況で見つかったものです。緑色凝灰岩の管玉と、石製品の未製品それから砥石、木製品などが出土しています。こちらは物だけが見つかっていて、実際にどのような遺跡だったのかというようなことについては詳しいことはよく分かっていません。

埼玉県なのですから、弥生時代の玉作りの状況というのが全く見つかっていません。関東全体で玉作りの状況、弥生時代にはちょっとよく分かっていませんので、古墳時代の前期の後半になって、突如玉作りが行われたようなかたちになります。ですので、おそらくですけども、すでに玉作りが行われていた北陸もしくは山陰のほうから人がやって来て、玉作りが行われるようになったのだらうと思いますが、実際どのような石を使っていたのか、そういったことについては梶山先生も先ほどおっしゃっていましたが、人がやって来るときに石と一緒に持ってきて玉を作っていたのか、もしくは地元の石を使って玉を作っていたのか、もしよそから持って来た石がどこの石なのかが分かれば、それは一体どこからやってきた人なのかということも分かるんじゃないかと思いました。そういったことも含めて、それぞれの遺跡から出てきた石、これが一体どこのものであるのかということを実験で調べてみました。埼玉の 6 をお願いします。それぞれの埼玉県内の遺跡の近くに、緑色凝灰岩の産地というものがあることが分かっていました。東松山市の葛袋というところに、緑色凝灰岩の産地があります。こちらなのですから写真のほう見ていただきますと、大きい茶色い石の中にちょっと緑色の石がご覧いただけるんじゃないかと思います。こんな形で緑色凝灰岩、青く玉作りに使えるのかなというような石が小さい玉になった状態で、礫岩という地層の中に含まれているという状況で見つかっています。こちらなのですから、この茶色い石の部分ですね、ここを割ると鮫の歯の化石ですとか貝の化石、そういったものも出てくるようなところですので、わりと化石好きの人、岩石好きの人には有名な場所です。ただし、現在はこの葛袋の石が出てくる場所については造成されてしまっていますので、現地を実際にご覧いただいてもこの状況、この石はご覧いただくことが出来ません。埼玉の 7 をお願いします。反町遺跡、前原遺跡、正直遺跡それぞれの石材をパッと並べてみました。そうすると一目瞭然で、それぞれ反町遺跡もちょっと暗めの石と明るめの石、前原遺跡はわりと明るめの色調の石しかありません。正直遺跡については上のほうは暗めの石なのですから、下は明るめの石です。これなのですから

も、配布資料のほうの 12 ページの表の 1 から 4 ご覧いただきますと、特徴をまとめてあります。こちらの石と、スライド埼玉の 8 をお願いします。先ほど、緑色凝灰岩の産地であるとした葛袋、ここに行って石を拾ってまいりました。この拾ってきた石を分析して、埼玉県内の玉作り遺跡から出て来た石材と、どのような成分が含まれているのかということとを分析の機械によって調査してみました。その結果なのですけれども、正直遺跡、反町遺跡、前原遺跡それぞれの遺跡から出てきたもののうち正直 A、反町 B、前原とした、向かって左側のグループ、こちらのほうと葛袋の B、こちらのほうが成分が一致することが分かりました。それから反町の A としたものと葛袋の C としたもの、こちらのほうも成分が一致することが分かりました。まだまだちょっと成分の分析結果については、もう少しきちんと調べないといけない部分もあるのですけれども、一応埼玉県の古墳時代の玉作り遺跡はおそらく地元の石材を使って玉作りを行っていたのだろうということが分かりました。」

丹羽野氏 「 ありがとうございます。前期の後半になると出雲の玉作りっていうのがすごくクローズアップされてくるのですけれども、関東は関東でこういう地元の石でも作っているのですね。出雲の石の玉も古墳から出るのですか？」

山田氏 「 古墳時代前期のものではないのですけれども、後期のものについては竪穴住居から出てきた玉を調べて、たまたま分析してみたところ、出雲の花仙山の石の特徴と非常に似たものが出てきています。」

丹羽野氏 「 なるほど。このようなかたちで、おそらく倭の王権の 1 つの差配の下で各地で玉作りが行われているという状況が分かったと思います。時間がなくなってきたのですよ、もっとたくさん話したいことがあったのですけれども、曾我遺跡の様子が分かりました。5 世紀ごろに集中して、大和王権の周辺で玉を作っているのだということが分かってきた。どうも出雲の石で出雲の技術でやっているけれども、出雲でそのときはもうやめているのですか？」

岩橋氏 「 5 世紀後半ですと、出雲地域でも広域に玉作りが展開して、盛んに玉を作っている時期ですね。それと同時に、出雲地域から玉製作工人が大和の曾我遺跡に出張をして作っているという状況も認められます。」

丹羽野氏 「 なるほどね、つまり出雲と大和が協業して一生懸命たくさん玉を作っているのが 5 世紀後半ごろの様子だというようなことだと思いますね。おそらく、このころに古墳の数がたくさん増えて、供給していかなくちゃいけないなかで、さらに大和、ちょうど倭の 5 王の時代で、特に最後の 5 世紀の後半というのは雄略天皇の時代ですからね、大和への産業の集中化みたいなものも様子が見えるようですので、そういったものの影響ではないかと思えます。

実はこの後、古墳時代後期の話をしようと思っていきましたが、予定の時間が来てしまいました。コーディネーターがまずくて大変申し訳ありません。詳しい話はなかなか出来ないのですが、ザクッと 6 世紀の玉作りを総括して、岩橋さんにまとめていただきたいと思います。

います。」

岩橋氏 「 6 世紀の玉作りですが、6 世紀前半までは曾我遺跡など近畿地方でも玉を作っているわけですが。継体朝までは石製の玉を作っていて、有力者の古墳にも石製の玉が副葬されるという時期です。大きな画期があるのは次の欽明朝に入る 6 世紀後半です。そこで曾我遺跡での玉生産はほぼ終了して、王権に関わる玉作りというのは出雲地域の玉作りのほうで引き受ける。出雲でも花仙山周辺に玉作り工房が集約されますが、ここで非常に大量の玉を作り出すのが 6 世紀後半ということになります。ですので、6 世紀後半から 7 世紀の前半にかけては王権に関わる玉作りというのは、日本列島の中ではほぼ出雲地域で一手に引き受けるという状況があります。」

丹羽野氏 「 ありがとうございます。やっぱり出雲が一手に引き受けていく背景ってというのはどうでしょうかね？ ト部さん、王権で別の玉を作り始めているっていうか、その石の玉の位置が変わってくるというようなことがあるのでしょうかね？」

ト部氏 「 確かに相対的に見ればそういうことになります。ただ需要の関係から言えば、曾我遺跡で作っていたのは滑石の白玉で、それを使う祭祀、需要というのがやはり減ってきたのだろうと。それは時代の流れであります。それと玉の組成としてガラス、金属の玉、それを組み合わせて、新たなコーディネートでそういう装身具っていうのが出来ているというのが実態ではないかと思えます。」

丹羽野氏 「 やはり 6 世紀の後半ぐらいになりますと、さらに大陸の情報や技術がどんどん入ってきて、今言ったように金属の玉ですよ、金ピカに光る玉とか、あるいはガラス玉もさらに一層製作や輸入が続いていって、こういう石の玉の相対的な位置の低下みたいなものも、やはり 1 つはある。やがて古墳もなくなっていくっていう大きな流れのなかで、ある意味石の生産、あるいは差配みみたいなものが出雲に任されるんじゃないかなと、そんな感じもちょっとしますよね。そこまで言っているのかどうかはこれからの研究課題ですが、これは 1 つ予察としてお話をしておきたいと思えます。」

5 分を過ぎましたので、大変申し訳ありません。玉作りを 1 から 10 まで、本当は古墳時代全体をまとめたかったのですが、最後は簡単なまとめで終わってしまいました。ただ全体をまとめますと、弥生時代からずっと玉作りがあるのですが、いくつか画期があるのですね。でもその画期はその玉がどうこうっていう単純な話ではなくて、必ず社会や政治や経済といったものと連動して起こっているってというのが、皆さんの報告からだいたい読み取れたんじゃないかと思うのです。たとえば弥生時代のなかでも鉄器が入ってくることによって技術が変わる、石材が変わる。古墳時代になって大きな政権体が出来ることによって、玉の意味付けが変わってくる。それから政権内のなかで王権のなかで勢力が変わってくる、あるいは、対外的な朝鮮半島との関係が変わってくるなかでの流通経路やさまざまなものが変わってくる。そういったポイントポイントに従って玉作り自体も変わっていくのだというようなことが、皆さんのお話のなかで、おおむね何となく読み取れるんじゃないかなと思っています。」

実はまだこの14県の研究、始まってようやく1年でございます。1年のなかで、玉作りがとりあえず今一番話せるだろうなということで、第1回のテーマは玉作りにしましたら、意外と私は結構いい成果が出ているんじゃないかなと思っています。また、びっくりしましたのはね、山田さんの成果なのですね。関東の玉作りで、ああやって科学的な成果を出したのは山田さんが初めてだと思います。

こういうようなかたちで、それぞれの県がそれぞれの立場で研究を進めてきて、新たな物が出たり、あるいは今の研究成果を追認するいろいろなデータが出てくるっていうのが、この玉作りだけでも、ちょっとこの1年間でも見えてきたんじゃないかなと、こういうふうに思っています。玉作りもどんどんこれからあと2年深めていきたいと思います。来年、再来年も同じように、こういう中間報告会のようなかたちでシンポジウムやりたいと思いますので、来年は違うテーマになると思います。どうぞお楽しみにしていただきたいと思います。

これで終わりたいと思います。ありがとうございました。」